

## 英医ウィリアム・ウィリスについて

鯨島 近二

眼科医・ウィリス研究の先駆者

British Medical Doctor, William Willis

Kinji SAMESHIMA M.D.

Ophthalmologist, A pioneer of the study of Dr. William Willis

今般、私は鹿大医学部の招きに応じて16年振りに帰省して、懐しい故山の風物に接し、又今日は敬愛する来賓先輩並びに知友各位の面前で、私が多年研究致しましたウィリス博士の御話を致す事は、本懐の至りで且つ一生の悦びと致す処であります。

ウィリスに就ては、先程佐藤八郎先生が式辞に述べて居られるし、又本日配布のウィリス略伝も、昨年秋、原稿を見て呉れと云う事で拝見致しました。中々立派なものでありますから、私が蛇足を添へる必要もありませんが、乞われるまま、今迄余り発表しなかった秘話、こぼれ話と申しまししょうか、裏話と申しまししょうか、それを3、40分に亘り御話致したいと思ひます。

私がウィリスの研究を思ひ立った動機は、昭和8年5月、私は重い腎臓炎にかかり、徒然なるまま、昭和8年6月発行の『文芸春秋』の随筆欄に、入沢達吉先生の「相良知安翁の功績」と云う題の随筆を読み、日本の医学を独乙風医学に転換し様とし、当時東京医学長兼大病院長であったウィリスの処置を大西郷に依頼し、大西郷は快諾してウィリスを鹿児島に連れて行った、その経緯が書いてあったのであります。ウィリスの名は、私が少年時代、今、名山小学校のある鹿児島師範附属小学校に生徒の頃、先生に連れられて、城山公園にウィリスの記念碑を見て、ウィリスの名前を知って居た。又、私の中学時代、ウィリスの遺児アルバート氏が、母堂の江夏八重子さんと相携へて鹿児島を訪問し、父の門下生が、磯の風景楼で盛んな歓迎会を催した事を記憶して居るので、ウィリスが英国の医師である位は知って居たのであります。然し、ウィリスに就ては、無知でありましたので、少し調べて見たいと云う念が起ったのであります。これが、私のウィリス研究に手を染めた動機であります。そこで、富士川先生の『日本医学史』を繙くに、ウィリスの事は、数ページ位書いてありました。それでウィリスのアウトラインを知る事が出来ました。当時私は、芝の田村町で開業致して居りました。茲にお出での樋口先生の樋口病院と同じ町で、目と鼻との間にある近距離の処でした。そこから程近い日比谷図書館や、東京大学の明治文庫等の、明治維新前後の文献を手当たり次第に漁りました。そしてその第一声を、昭和9年11月の日本医史学会で発表し、入沢、富士川両先生を初め、先輩各位の追加や激励の辞がありました。



記念式典に於いて講演する筆者

都合の良い事には、昭和10年4月、鹿児島県史編輯所が丸ビルに設けられたので、私はそこに通って鹿児島方面の資料を漁りました。岩村家の丁丑日記、又は忠義公年表等で、鹿児島方面のウイリスの事を知る事が出来ました。昭和10年9月に、日本医史学会で第2回目の発表を致しました。その後ウイリスに関する史料は、断簡零墨と雖も保存致しまして、又写真も集めました。昭和20年3月、強制疎開を喰って移転の際、紛失したものもありました。そして明治文化研究会、汲泉社、薩藩史研究会や雑誌で発表致しましたが、昭和12年に入り、我が国は戦争に突入し、雑誌の方は、紙の配給が窮屈になりましたので、かかる不急の記事は載せて呉れん様になりました。

私は、ウイリスが足跡を印した処、即ち、鹿児島、東京は勿論、京都、横浜、新潟、会津若松、遠くはロンドン、バンコック迄も訪ねました。つまり、手で書くのでなく、足で書いたのであります。

前置が長くなりましたが、ウイリスと云う人は、筆不精であったか、或いは多忙のためか、シーボルトやポンペ等が、日本に関する大きな著作がありますのに、そう云う著作はありません。只、専門書として、鹿児島時代に『黴毒新論』があります。これは、ここの県立図書館に所蔵して居ります。もう一つは、東京時代に『薬範』と云う本で、これは本郷の順天堂大学の本院であった佐倉の順天堂病院長の佐藤恒と云う先生が、先年私へ、端本であるが進呈すると云って寄贈下さったので、薬物の本で、三冊の内下巻だけである。その他、鹿児島時代、化学に関する本があると聞いて居りますが、よく知りません。東京時代、及び鹿児島時代の「日講紀聞」が沢山ありますが、これは著作とは云へないでしょう。

ウイリスが脚光を浴びたのは、戊辰の役、鳥羽伏見の戦争以後の事でありまして、その以前、横浜時代の事は余りよく分りませんでした。ウイリスの親友、アーネスト・サトー（日本人みtainな名前ですが）の著書、直訳すれば、『日本に於ける一外交官』で知る事が出来ました。この本は、サトーが日本に着任の、文久2年から明治2年の賜暇帰国する迄、6年間の日本の事を日記に基いて書いたもので、これには3種類あります。其一は、文部省維新史料編纂事務局訳編で、書名は、『維新日本外交秘録』昭和13年3月発行、孝明天皇が毒殺されたとか、色々の処がカットしてあります。其二は、塩尻清市氏訳『幕末維新回想記』と云ひ、昭和18年8月、日本評論社から発行。其三は、坂田精一氏訳『一外交官の見た明治維新』と云ひ、昭和35年9月、岩波書店から発行されて居る。

私の研究して居た頃は、未だ訳本がなかったので、原書による外なかったのであります。サトーは、親薩摩で、書中出来る処サツマ藩士の名前が出て参りまして、(サトーは日本名を「薩道」と云ひ、サツマとの親近感があつた様です)この本で非常に啓発されました。

英国のアイルランドは南北に分れ、南部は独立してアイルランド共和国となって居る。北部は英領であつて、ウイリスは1837年、我が天保8年、英領アイルランド、フェルマナー州のフローレンス街に生れた。ウイリスの遺児アルバートが、昭和17年私に寄せられたウイリスの家族書きによれば、ウイリアム・ウイリスは、3人兄弟の末弟で、長兄は、James A. Willis. 次兄 George Willis. 3番目、William Willisで、ウイリスには、Dr. George Owen Willisと云う子供があつた。Albert Willisによれば、half brother to me by another mother 即ち異母兄で、医師であつて、アメリカのカリフォルニア、Glass Valley に行つて53才で死んだ。その後の事は分らぬと書いてありました。私は、昭和38年から39年にかけて、カリフォルニアに半年行つて居りましたから、調べて見ましたが、分りませんでした。昭和10年、天長節の日、三田村スエ子さんと云う老婦人を訪ねた。夫人は、ウイリスの高弟であつた三田村一氏の弟の三田村敏行と云う医者で、鹿児島医学校に勤務した人の未亡人で、東京大学教授であつた三田村篤志郎氏の叔母さんに当る人で、三田村氏の紹介で訪問致しました。鹿児島市の出身で、ウイリスの近くに住んで、ウイリス夫妻とは特に親交あつたそうで、その話には、ウイリスには George と云う男の兄がありまして、当時12・3才、混血児ではなく、ウイリスが英国に居る時出来た子供と聞いて居ります。との事でしたが、この家族書と一致して居ります。これに就いて、面白い話があります。昭和26年5月頃、米駐留軍軍隊情報部に勤務して居た山口清隆と云う未知の人から、一通の手紙が舞ひ込みました。文面によれば、自分と同じ処に W. ウイリス少佐と云うアメリカの軍人が居る。その人が、何かの本でウイリスと云う英国の医者が日本に来て、日本の医学教育に非常に貢献したそうだが、ヒョットすると自分の親戚かも知れぬ、誰かウイリスの事をよく調べて居る人はないかと、方々聞き合はせて居る。あなたが一番よく知つて居られる相だから、話を聞きたいと云うから一度逢つて呉れないか、東京大学の小川博士の紹介状を持って居るとの事でしたから、私は来訪の日時を指定して返事を出したら、その時刻に、ここに御出での小川先生の紹介状を持って参りました。見るからに、6尺豊かの偉丈夫で、ウイリスの孫かも知れぬと興味を持って居りました。色々話してやりました。自分は歴史の事は余りよく知らないが、国のオヤヂに通知して聞いて見様との事でしたが、後日、親戚ではない事が分りました。

ウイリスは、1859年(安政6年)エジンバラ大学を卒業して、直ちにロンドンのミドルセックス病院に勤務したとあ

るが、どの位居たか不明であるから、私は昭和10年にその病院に照会状を發した処、1859年5月19日から18ヶ月間、1年半、Physician's Pupil 直訳すれば、医生、医局員として勤務したとあります。私は、一昨年8月ロンドンに行った時分、この病院を訪問致しました。この病院で、The History of the Hospitalと云う本を呉れました。これによると、この病院は、200余年前の1746年に創立されたもので、ウイリスは100余年前この病院で医学修業して、文久元年英国公使館附医官として日本に来朝したのである。時の英国公使はオールコックで、間もなくパークスが代ったのである。『近世名医伝』には、ウイリスの来朝を慶応元年と書いてありますが、これは誤りで、文久元年が正しいのです。

ウイリスと鹿児島との関係は、生麦事件から始まる。文久2年の生麦事件には、ウイリスは真先に駆けつけて負傷者の手当をして居る。文久3年の薩英戦争には、外輪船アーガス号に乗り込んで鹿児島湾に来て居る。その後薩英は仲直りして非常にいい仲となった。(サツマからも英国へ留学生を送り、又英国からもサツマに文明の利器を提供したりして、非常に親善な関係になりました。)斯う考へると、生麦事件や薩英戦争はサツマに目を明かして呉れたものと私は考へます。それで、慶応2年6月にはパークス夫妻及びキューバ提督一行を鹿児島に招待して、非常に歓待をした。その時ウイリスも随員として鹿児島に上陸している。徳富蘇峯翁の近世日本国民史によれば、サツマ方の饗応には料理が凡そ40品、三鞭酒、日本酒、麦酒等を供し、頗る鄭重を極めた。その時刻は約5時間を費したと書いてある。かかる御馳走は徳川將軍家にもなかったであろうと思ひます。作家の獅子文六氏の海軍と云う作品に、40品の事が書いてありますが、蘇峯翁の近世日本国民史から引用されたものと思ひます。

その席上、パークスはサツマの家老喜入撰津に向つて、突然、「あの桜島を英国に譲つて下さる訳には参りますまいか」と云う申入れをした。これこそ英国の恐れるべき東洋侵蝕の奥の手であった。その時、喜入撰津はにっこりと笑ひながら、極めて鷹揚な態度でパークスに向つて、「それはいとおやすいことでごさる。御所望とあればいかにもお譲り申さう」と何気なき体で云つたのである。更にかかわらずにっこり笑ひながら、「しかし閣下、あの島を英国までお運びになるにはさぞ大きな船が要りましような…」と云つてパークスの顔をのぞきこんだ、と中田千畝氏の『日本外交秘話』と云う本に書いてあります。家老としては、パークスのこの無法な申入れを正面から拒絶すれば、折角の招待の座が白けてしまうので、これを一つ揶揄してやるがよいと云う氣になつて、一旦は公使の申入れをすなほに聞き入れてやり、最後に巧妙な手で見事な背負投を喰わせたのである。(流石のパークスも家老の軽妙老練なる外交手腕にはまゐってしまい、そのまま引きさがるより仕方がなかった。)喜入撰津が不用意にも桜島を英国に売払つたら、今頃は鹿児島市は香港の九竜みたいで、英領になつて居たかも知れませぬ。思へば慄然と致します。

慶応4年正月、鳥羽伏見の戦争が始まり、京都の相国寺内の養源院に薩藩病院を設け、ウイリスをして治療せしめた。西郷慎悟(後の従道、頸部の負傷)も治療を受けた一人である。途中、警護に當つた隊長は、野津七左衛門(野津元帥の兄、後陸軍中尉)、隊員には日本海々戦の勇将、上村彦之丞(後海軍大将)も居りました。私は養源院を3回訪問致しました。第1回は昭和17年、第2回は昭和34年、第3回は昨年(昭和42年)で、住職の平塚氏ともよく知る様になりました。薩藩の負傷兵が徒然なるままに刀で柱に斬りつけた刀痕が5本の柱に残つて居る。

4月13日には横浜に軍陣病院が設けられ、ウイリスが治療に當つて居る。最初に、芝の赤羽根の有馬上屋敷に病院を建てて治療する筈であつたが、横浜の英国公使館で病氣中のパークスの俸を治療して居たので、江戸に行く事は困難であつた事や当時副領事であつたので、横浜を去る事が出来なかつた等で、横浜野毛町に軍陣病院を設ける様になつたのであります。ウイリスの外、シトル、ゼンケン、ドングリー等の外人医師も勤務して居る。この病院は、仮病院、横浜病院、養生所、修文館、野戦病院、天朝病院等の異名がある。

この病院の日記が先年東大医学部の小使室の棚から偶然発見され、その写本を私は秘藏して居る。非常に貴重な文献である。官軍の病院であるが、サツマの負傷兵が主である。試みに、薩藩士の入院患者で後年名をなした人々を挙げれば、野津七二(会津六番隊長、後元帥道貫)5月2日入院、6月9日退院、上村彦之丞(日本海の勇将)5月16日入院、7月18日退院、黒田才藏(後鹿児島県師範学校長となつた。)5月17日入院、10月17日退院、山本英輔大将の先考、山本吉蔵。

直木の『南国太平記』で活躍した快男児で、西郷、勝、の両雄の会見の橋渡した益満休之助は、5月15日上野の彰義隊の戦争に黒門前で負傷して入院したが、病室の採光が悪いので、気分が好い日に是非と云つて病室の移転を希望した。丁度折悪く、当日は大雨にも拘らず担架に被ひもせず運んだため、傷口から黴菌が這入つて化膿して、このため28才を一期として5月22日夕7時死亡、中村半次郎、後の桐野利秋は5月19日入院、8月21日退院。関寛斎の『戊辰役軍陣病院日記』によれば、半次郎は5月21日ウイリスの手術を受けて、刀傷右掌右指を切断すとあり、私が何処かの図書館で見た本に、西郷以下の屍体検案書には半次郎は右指でなく、左中指旧切痕とあつた。何れが真か分かりません。誰か教へていただきたい。序でに申し上げますが、その屍体検案書に、西郷と桐野の鞞丸は大きい。私学校幹部の鞞丸は大きい。

最後に鹿児島県人の擧丸は一般に大なり。これ焼酎を飲むため也、と書いてあった事を記憶して居る。セゴドンのウキンタマと云へば有名な話である。(私はこの事を郷土雑誌の三州雑誌に書いたが、昭和20年、強制疎開を命ぜられ、その際古雑誌などは捨ててしまいました。)話が擧丸の話に飛躍致しましたが、ウイリスは東北戦争従軍のため、8月20日江戸を出発して高田、柏崎、新潟を経て、新発田では10月5日征討総督仁和寺宮(後の小松宮)に謁見した記事が、香川経徳の『慶応戊辰北越従軍日記』と云う本に書いてある。それから会津若松に至り、敵味方の区別なく負傷兵を手当てして居る。謁見の場所、新発田城は今はどうなっているか、新発田市長に本日照会致しました処、自衛隊の駐屯して居る由、この従軍記をウイリスはパークスに報告し、パークスから本国政府に報告し、政府から英国議会で報告し、議会から発表したBlue Bookがあります。Blue Bookに対して、White Bookなる政府が発表するものがあります。日本でも真似をして経済白書、厚生白書と云うが如きです。

ウイリスの書いた従軍のMemorandumはBlue Bookとして英国議会で発表され、私は仮に「東北戦争従軍記」と名付けました。このBlue Bookは、昭和17・8年頃私の友人の某大学の経済史研究室で偶然発見致したのですが、門外不出の貴重本であるため、夜陰私かに複製して私に提供して呉れました。既に翻訳を了へて肉と骨とは出来て居りますが、未だ衣裳を着せられぬのでそのままになって居ります。私はこれを、ウイリスの「東北戦争従軍記」と銘打って出版致そうと思ひます。従来の資料では、富士川先生の『日本医学史』初め、その他の文献には、この戦争でウイリスがアンパチオンを16回行ったと書いてありますが、ウイリスの報告には、切断術を行う事38回、23個の銃弾を摘出し、200名以上の患者の腐骨を切除したと書いてありますから、本人の書いたものが一番正しいもので、従来の記載は訂正すべきものと思ひます。

ウイリスは明治元年12月に帰京して2年3月、東京の医学校長兼大病院長となって市井の患者を診療し、又学生に講義してクロロホルム麻酔、支肢切断術を行って、わが邦外科学の発達に貢献する事大であった。此処の入院患者の負傷兵は気が荒くて、枕を投げたり等乱暴するものですから、女の看護人をつけたら優しくなるだろうと附近の女を集めて看護せしめた処、果して優しくなったと云う。この中、気の利いた女に杉本かねと云うのを、佐藤尚中が順天堂創立の際連れて行って看護婦となし、後に婦長となした。之が日本に於ける看護婦の最初であろうと思ひます。

ウイリスは、明治2年12月3日附の辞令で鹿児島に赴任している。之を太陽暦に換算すれば、明治3年1月4日である。是れより先、明治2年4月にはウイリスと共に横浜軍病院に働いて居た英医シトルの雇傭方を政府に願出で、許可され、契約が成立したが実際には着任しなかった。

鹿児島へ赴任したウイリスは、午前を診療、午後を講義とした。学生は本科と別科とに分れ、本科即ち原語科は正科として英語を教へ、原書で講義した。別科は訳語科、簡易科とも云ひ、2年修業で多くは医者の子弟で、実地研究、調剤等を教へ、後年蘭方医と云ったのはこの人達の事であった。これは、高木、三田村氏が教授した由で、慈恵医科大学の創設者、高木先生は2年位ウイリスの門下にあつて、明治5年海軍に入り累進して海軍軍医総監、男爵となられた。同大学は我が国唯一の英国流の医育機関であつて、ウイリスの亜流を汲んだものと云つても差支へないと思う。

ウイリスが使用したあの赤倉は、私は少年時代あの辺を散歩致しましたから、よく知つて居ります。昭和14年帰省の折、所有者の藤田氏を西田橋の近くに訪問致しまして、色々話を聞きました。同氏によれば、赤倉を同氏の先代が私学校崩れの三州義塾から購入して質屋の倉庫に使用した。私は同氏の許可を得て倉の内に這入りましたが、暗くて病院に使ったかどうか、面積など測りましたが、その記録を紛失してありません。

昭和18年10月、当市の郷土史家の池田米男さんが来訪しての御話に、今年1月赤倉の煉瓦壁破壊したと藤田氏がその1個を持参した。見るに、小根占と刻してあつたから、大隅の小根占に関係があるだろうと思つて、二中の校長、池田俊彦氏に聞いたが、知らぬと云うし、更に小根占出身の当時の県会議長、坂口壮介氏に聞いた処、小根占に「カラッパ山」と云うのがあり、英人のカラッパがその土を採取して煉瓦を焼いたから、その名をとつてカラッパ山と云うとの話も、東京で坂口氏に逢ひましたから聞きました処、同様の話でした。十年位前、同地出身の代議士であつた津崎尚武氏を訪ねて聞きました処、小根占に雄川と云う川がある、その河口で昔煉瓦を焼いたと云う話であつたとの事、このカラッパと云うは、慶応元年3月、森右永等留学生一行15名を串木野羽島から、英人貿易商グラヴァーの所有船で出発した記録がありますから、あの赤倉は慶応1、2年の頃建てたものと想像されます。そのカラッパは、今長崎で名所の一つに数へられて居るグラバー邸のグラバーであります。私は先月の末、小根占町長に照会致しました処、慶応元年、藩主島津忠義が藩士園田清吉に命じて、小根占郷の川北須崎に煉瓦製造所を設けて、煉瓦を焼かしたと云う返事でありました。

ウイリスは、明治8年一旦帰国して、9年再来致して居りました。その折、大西郷からウイリスにサツマ焼陶器を贈つて居ります。それが、林権助さんが駐英大使時代の明治11年に、ロンドンで売りに出ていたのを買われ、日本に持って帰られた。私はそれを、昭和15年に林家の当主林安氏から見せて貰ひました。その薩摩焼は、バスケット状をなした把

柄がついている菓子鉢と、ウイリス自筆の由来書がありました。それによると、大西郷が藩主から頂戴したもので、数百年前に焼いたものである、と林権助さんの箱書もありました。これは今度の戦災で皆焼けたそうです。

ウイリスは、御土産として大西郷に金時計を贈って居ります。それは今、市来家にあります。昭和27年帰省の折、市来政敏さんに逢ひました。その時計は、家宝として息子正武氏が東京に持って行って居るとの事、私は東京でその時計を、正武さんが持って来て見せて呉れました。大形の懐中時計で、鍵巻と政敏さんの箱書がついて居ります。それによると、南州翁が10年役に携帯されたが、戦半ばに不便を感じ、本営附で始終翁に随行した甥の市来宗介が、米国から持ち帰った小形金時計と陣中で交換された。宗介（翁の妹の子）は、城山陥落までこの時計を使用したが、身辺危きに臨んで翁と相前後して戦死する間際、城山洞窟に於て急に遺族への形身として従卒末吉兄弟へ托したが、一人は尻へ挟みて禪で堅く体に締め付け、辛ふじて城山を脱出して、二人は遠く遺族の避難した県下日置郡東市来村に訪ねて手渡した。之れが、今日迄市来家に伝わり、代々秘蔵して居るといふのであります。

その他、ウイリスが江夏八重子さんとの結婚確認証等あります。

（昭和43年4月21日、鹿児島大学医学部開学25周年記念、鹿児島西洋医学開講百年記念式典における記念講演）